地域　担い手　サポ・センだより

JAグループ山形

脱・米単作、学会も注目

JA山形もがみの園芸振興

「米単作と出稼ぎから脱却し、園芸で農業を十分やっていける。それを示した全国でも優れた事例だ」

山形大学農学部の角田毅教授は、JA山形もがみ管内の園芸産地づくりに注目。8月25日、鶴岡市の農学部で開かれる東北農業経済学会山形大会で発表する。

典型的な中山間地。冬は雪に閉ざされ、零細な米作りと出稼ぎが農家の主な収入源だった。

角田教授が特に注目するのは、20年以上も前から園芸への転換を図った先見性と、生産者を育てる地域の力、園芸に取り組みやすい環境づくりに努めてきたJAの力だ。

取り組む園芸作物は、トマトやキュウリ、ニラ、ネギ、アスパラガス、ピーマン、タラの芽など多彩。

中でもトマトは県内一の産地に成長した。2016年度のトマト生産者は40人、ミニトマトは32人。作付面積13・6㌶、生産量は1294㌧。販売額は5億2700万円。販売額1000万円以上の生産者が21人もいる。

大蔵、鮭川、戸沢の三村園芸振興協議会が、参入を目指している研修生を11年度からJAを通じて募集。紹介を受けた農家が1年間研修を受け入れて、育てている。

JA山形もがみ園芸生産組合の柿崎久好組合長は「新しく始める人には、もうかることと喜びを教えている」と話す。研修後も技術指導などで温かく見守る。

1990年代にトマトとミニトマトのJA選果施設が相次ぎ完成。JAグループ山形・地域ぐるみによる園芸産地づくり支援やJAバンク基金も活用。角田教授は「JAのハード、ソフト両面からのきめ細かな対応も大きかった」と語る。

来年からの米政策見直しを見据え、大蔵村清水の八鍬清さんは「1年を通して農業ができるよう、工夫が求められている」と話した。

角田教授は、複合化を含め、東北の水田農業と地域農業の方向性を探るヒントがあるとみている。

柿崎さんのトマト栽培ハウスで話を聞く角田教授㊥

©日本農業新聞　無断複製転載を禁じます。